

2004年の主要水産物の需要と供給

単位：数量，1000トン、価格，円/kg

年	数 量						金 額 また は 価 格						
	生 産 地 産 202漁港	輸 入	輸 出	消費地 10大都市	在 庫	生産額 (億円)	産 地 (億円)	輸 入 (億円)	輸 出 (億円)	消費地 支出1世帯	魚介類 消費	為替 レート	
15	6083	2949	3325	370.5	2034	1286	16000	180	15690	1356	763	98,475	116.4
16	5733	2864	3484	424.3	1994	1227		192	16339	1486	760	94,809	108.3
%	94	97	105	115	98	95	0	107	104	110	100	96	93

数 量

本年の産地水揚量（統計情報部集計による全国202産地漁港）は、再度減少に転じ286万トンで前年をやや下回った。

全体的な特徴としては浮魚青物類の減少、マグロ類の増加が顕著であった。

大きく増加した魚種は、スケトウダラ、アカイカ、カキ類等であり、大きく減少した魚種はホタテガイ、サンマ、カツオ、スルメイカ、カタクチイワシ、ムロアジ類、シラス、ミール等であった。

輸入は、348万トンと各国との競合もあったが円高もあって前年をやや上回った。

この中で目立って増加した魚種は、スケトウダラすり身、銀ザケ、アジ、カツオ等で、その他フィレー製品も増加している。逆に減少している魚種で目立ったものは、サバ、冷凍メバチすり身、イトヨリのすり身、メヌケ類、イワシ類、ニシン等であった。

輸出は、約万42.4万トンで前年（37万トン）を引続き上回った。

本年は、タラとサバ類の急増が極めて顕著で韓国、中国に多く向けられた。またビン長やキハダも缶詰向けにタイに多く出されたほか、アキサケ、サンマ、イカ類も数量的には多く、カツオのみが大幅に減少した。

消費地入荷量（10大都市）は、199万トンで前年（203万トン）をやや下回り近年の減少傾向は今年も続いた。

目立って多くなった魚種は、生鮮ではクロマグロ、天然ブリ類、太刀魚、コウイカ類で、冷凍ではキハダ、タラ、タイ類であった。大きく減少した魚種は、生鮮ではカツオ、サワラ類、ホタテ貝で、冷凍ではメバチ、マス類、ニシンであった。本年は生鮮品、冷凍品とも微減であり、海藻類の依然健康志向も強く引続き増加した。

在庫量は、月平均122万トンで前年（128万トン）をやや下回った。これは、輸入量が増加したものの国内生産量の減少や輸出の増加もあって少なくなったことを反映したものである。

価格・金額

16年の産地価格は、192円で生産減少もあって前年（180円）をやや上回った。

本年はカツオ、スルメイカ類、サンマ等の多獲性魚類の高値が反映したものである。

目立って高かったのが上記3魚種の他、サバ類や生鮮キハダであり、逆に安かったのが巻き網物が好調であったクロマグロを始め、冷凍ピンナガ、生鮮メバチが漁不振や品質等の影響を受けた魚種も多かった。

消費地価格（10大都市）は、760円でほぼ前年（763円）並みであった。

目立って高くなった魚種は、生鮮では産地同様カツオ、サンマ、ホタテ等生産に左右された結果がでている。冷凍では引続き国内搬入が少なくなっているサバ類とカジキ類であった。

逆に安かったのは生鮮タチウオやヒネ在庫があった冷凍サンマ、冷凍タラであり、その他の魚種は大きな変動がなかった。

輸入金額は、1兆6339億円（前年：1兆5690億円）で前年を649億円上回った。

輸出金額は、1486億円の前年（1356億円）を130億円上回り、量、金額とも増勢傾向が顕著になっており、今後海外への指向は一段と強くなるものとみられる。

円 レ ー ト

16年の円レート（対USドル）は、年平均108円で前年（116円）より8円の円高となった。

円レートは、85年の9月のプラザ合意以降一時的な円安がみられたものの急速な円高・ドル安傾向が10年間続いた。

しかし、95年秋から円安に転じ、97年以降に証券会社、銀行の倒産が続き金融システム不安等も重なり一層円安が進行し、98年も一時140円台の安値を記録するなど秋口まで円安が進行した。その後、一時年末にかけて円高（113円）へと反騰したが、99年は夏場までやや円安（114～121円）で推移したが、下半期には急激に円高に反騰し、12月は103円まで急騰した。2000年は年末の円高の103円からスタートで、一時的な円高はあったが、基本的には円安傾向で推移し、年末には111円まで下げた。01年は長引く不況や銀行、ゼネコン、流通分野での倒産、再編もあり、年を跨いで急激な円安が進行し、9、10月に119円とやや円高に戻したものの12月には124円と円安に急落した。02年には131円の円安から始まってその後円高に転じ、8月に118円まで上昇したが、一向に景況感の低迷もあり12月には122円まで下げた。その結果、為替は10年前の水準まで戻した。03年は年初の119円から始まり9月までは2円前後の幅での小さな動きであったが、10月に111円と急騰し、11、12月と小幅円高で推移し108円まで上げた。04年は年初106円の円高で始まり、5月に112円の円安に振れたが、その後は円高に転じ11月以降は104円、103円まで上げた。

（参考：84年237円 85年240円 86年170円 87年146円 88年128円 89年137円 90年145円 91年135円 92年127円 93年112円 94年102円 95年94円 96年108円 97年121円 98年131円 99年114円 2000年107円 2001年121円 2002年126円 2003年116円 2004年108円）

石 油 価 格（1kl当たり）

16年のA重油価格は、年初は前年末からの30,000円から始まり5月中旬まで安定して続いたが、下旬に31,000円に上げ、その後6月中旬に32,000円、下旬34,000円と上昇した。この価格は9月上旬まで続いたが、その後中旬に37,000円、そして11月上旬に39,000円まで高騰し、年内一杯続いた。本年は前年以上に高騰が著しく、翌年に課題を残した。

参考：近年の最高値74,000円/kl（1982年11月）